

ヘルマン・ヘッセと魔術 (27)

# ヘルマン・ヘッセと魔術

田 中 裕

はじめに

ご紹介に預かりました田中裕です。私共「ヘルマン・ヘッセ友の会」が翻訳・刊行に従事してきた「ヘッセ全集」は「エッセイ全集」の最後の配本である第五巻が今年の1月に発行され、無事全巻完結できました。作品全集十六巻、エッセイ全集八巻、合計で二四巻という膨大な全集です。シリーズ最初の配本だった『車輪の下』（伊藤貴雄訳）を含む「作品全集」の第四巻を発行したのが2005年4月のことでしたから、完結までにはほぼ七年を要したことになりますが、計画や下準備はその三年ほど前から始めていましたので、十年越しの大事業でした。それを期せずしてヘッセの没後五十年という記念すべき年に終えることができ、感無量です。

ヘッセは1962年8月8日、モンタニョーラの自宅でモーツァルトのピアノソナタをラジオで聞きながら就寝し、翌朝11時頃遺体で発見されました。9日の午前10時頃脳卒中に襲われて亡くなったのだらうと推測されます。実はこの同じ年の3月に私は大学を卒業しています。卒業論文は「ヘルマン・ヘッセの『荒野の狼』について」という題でした。指導教授だった小塩節先生から、ヘッセは若い人にはこまめに返事を書いてくれるそうだから、今のうちに手紙を出しておくといいよ、と言われながら、気後れがしてそのままにしていた間の出来事で「シマッタ！」と後悔したのも後の祭りでした。そ

の五十年後にこういう仕事を完成させることができたのも何かの機縁かと、大変嬉しく思っています。

## 世界文学への招待

さて、今日のこの講義は「世界文学への招待」という講座の中に位置づけられていると伺って大変嬉しく思いました。最近では日本でも文庫本が盛んで、いろんな出版社が文庫本を出していますが、日本で一番初めに文庫本の出版を始めたのは岩波文庫です。岩波書店が文庫本を始めるにあたって模範にしたのはドイツのレクラム文庫で、これはアントーン・フィリップ・レクラムという人が息子と共に創刊した廉価版の名著シリーズで、レクラム文庫には古今東西の世界の古典が網羅されています。ヘッセはこのレクラム文庫から依頼されて1927年に「世界文学の文庫」Bibliothek der Weltliteraturという世界文学案内のパンフレットを書き、これもレクラム文庫に収められました。その冒頭にヘッセはこう書いています。資料をお配りしておきましたが、長いので要約してご紹介します。

本物の教養とは、お金持ちや有名人になるといった何らかの到達目標に向かって苦しい努力をすることではなく、スポーツのトレーニングと同じで、生命感と自信を高め、人生を楽しく幸福にし、安心感と健康感を高めてくれるもので、それ自体が目標であり、個々のステップを達成することが喜びや満足をもたらし、それが次のステップへの刺激と原動力となって、人生に意味を与え、過去を明らかにし、未来に恐れずに立ち向かえるようにしてくれる。…そのような教養に至る道のうち最も重要な一つが世界文学を学ぶことである。その道は限りなく続き、誰も、すべての文学を学び知り尽くすことはできないだろう。重要なことは、できるだけ多く読んで知っていることではなく、自分で自由に選んだ傑作に没頭して、人間が考えたことや努力して獲得したものの広がりや豊かさの予感を得、その全体性そのものと活気のある共振する関係に至ることである。これこそ、人生すべての意味である。

こう説いてヘッセは、これから自分で世界の文学を学ぼうとする人たちのために古今東西の優れた詩人や作家の作品を紹介しているのですが、これは世間一般に流布している読書案内や文学史などから拾ってきたものではなく、自分の実際の読書体験に基づいた、個人的な基準による選択で、「かなり偏りがあるかもしれない」と言っていますがギリシャ、ローマを初めとするヨーロッパの古典だけでなく、インドや中国、アラビアなど東洋や中東のものにまで及んでおり、その守備範囲の広さに驚かされます。『車輪の下』にも書かれているように、ヘッセは十代の初めに神学校を中途退学してから正式の学校教育は受けておらず、機械工や書店員として働きながら勤務後の時間を利用して独学で自己教育をした人で、作家となってからも新聞や雑誌に数多くの書評を書いてきた人ですから、どんなに凄い読書家であったか想像できるでしょう。そしてこの文章の最後を彼は「傑作が我々にその真価を示す前に、まず我々が傑作に対して自らの真価を示さなければならない」という言葉で結んでいます。この言葉の意味を噛み締めてください。

## ヘルマン・ヘッセと魔術

今日の講義は「ヘルマン・ヘッセと魔術」という題です。「魔術」などという言葉を聞くと、ハリー・ポッターを想像したり、何かオドロオドロシイ感じを抱かれるかもしれませんが、ヘッセは高名な詩人、小説家であったと同時に、実は大変な「魔術師」でもあったのだ、というお話なのです。1921年から24年にかけてヘッセは、『魔術師』『略伝』『魔術師の幼年時代』と題する自伝や自伝風のメールヒェンを三編書いており、そのうち二編の表題には「魔術師」という言葉が使われていて、十三歳になるまでは将来何になるかということを真面目に考えたことはなかったけれど、子供心に一番なりたかったのは「魔術師」だったと言い、それが自分の欲求の最も奥深い切なる方向であり、大人の馬鹿げた申し合わせでしかない、[いわゆる現実]と呼ばれるものに対する不満から、これを拒否し、魔法にかけて変え、高めたい

という願いだった、「振り返ってみると、私の全生涯は魔法の力へのこの願いに運命づけられていた」と述べています。

この魔術への憧れの背後には、ヘッセのほぼ全作品を貫いている Eigensinn という考え方を如何に展開してゆくかというテーマがあります。Eigensinn とは一体何なのでしょう？ 彼は 1917 年四十歳の時に Eigensinn と題するエッセイを書いています。

### Eigensinn (我がまま)

Eigen はドイツ語で「自分自身の」「独自の」という意味、Sinn は「心」「気質」「考え」「意思」と言った意味の単語です。それを合わせた Eigensinn は独和辞書に記されている日本語の「我がまま」と同じように、ドイツ語でもあまり良い意味では使われません。強情、頑固、意地っ張りといった、自分勝手に協調性のない、どちらかという扱いにくい性格のことを言います。ところがヘッセはこのエッセイの中で、Eigensinnこそ自分がこの世の中で大いに気に入っている唯一つの美德である、と言っているのです。

美德とは、つまるところ何らかの掟に対して従順であることだ、とヘッセは言います。道徳や義務、法律、宗教的戒律、世の慣習、常識、こういうものを尊重し、それに従順である人、自ら進んでそれを受け入れ、率先してそれに殉ずる人は徳の高い人として尊敬されます。しかし突き詰めて考えると、どんな美德も人間によって定められた掟に対する服従です。ところが唯一つ我がままだけは別な掟、唯一絶対に神聖な、自然から与えられた自分自身の中の掟、「われがまなる心」に対して従順なのです。

この地上のあらゆる事物は、どんな物も、どの石も、草も花も、蝶も、小鳥も、生まれながらに自然から与えられた生命と成長の意志、つまり「我がまなる心」にただひたすら従って成長し、生き、行動し、感じています。そして世界が素晴らしく、豊かで、美しいのはこのことに基づいています。この宇宙のどんな小さなものもそれぞれに、自分の「心」を、自分本来の「掟」

を自分の中に持っていて、その掟にしっかり迷うことなく従っていることから来ているのです。

ところが、この永遠の呼びかけに従い、深く生まれついた自分本来の心が命ずるままに存在し、成長し、生き、死ぬ恩恵を与えられていない哀れな呪われた存在が、この世に二つだけある、とヘッセは言います。人間と人間によって飼いならされた家畜だけは、この永遠の生命と成長の声に従わずに、人間によって打ち建てられ、そして時と共に絶えず人間によってまた破られ変えられてしまう恣意的な掟に従うように定められているというのです。

そして奇妙なことに、自分本来の自然な掟を運命としてそれに従い、人間が定めた恣意的な掟を黙殺した、イエス・キリストやソクラテスなど、ごく僅かな人たちはそのために世間から有罪宣告を受け、磔や投石によって処刑されますが、後の世ではしかし、まさに彼らこそが英雄として解放者として永遠に尊敬され、今現在生きている人々に対しては恣意的な掟への服従を最高の徳だと称えている同じ人類が、彼らをこそ永遠のパンテオンに迎え入れるのです。

このようにヘッセは我がままを賞賛し、人間各自が自然から与えられた、唯一神聖な生命と成長の声に従って生き、自らの内に可能性として与えられているすべてを生涯を通じて発展・開花させなければいけない、それこそが人間に与えられた唯一の使命である、と言う立場に立つことを表明しています。この *Eigensinn* という言葉は、ヘッセの思いを反映しようとするなら「愛我心」と訳すべきではないかと思いましたが、今回の全集でたまたまこのエッセイを私が訳すことになって「シメタ!」と思ったのですが、残念ながら結果としては「我がまま」と訳さざるを得ませんでした。「愛我心」という日本語はありませんし、これでは世間一般に通用している悪い意味での「我がまま」のニュアンスを伝えることができないのです。

1914年に第一次世界大戦が始まって、この戦争に勝って後進国ドイツはヨーロッパに君臨するのだと国民の大半が熱狂した時に、当時既にスイスに住んでいたヘッセが、祖国から痛烈な攻撃を浴びながら戦争反対の論陣を

張ったのも、いわゆる「平和主義者」だったからではありません。その年の11月3日の新チューリヒ新聞に発表された『おお友よ、その調べにあらず!』  
O Freunde, nicht diese Töne! という論説の中で「戦争は人間が人間の運命を承知して以来常に存在し、戦争がなくなるだろうと信ずるに足る理由は一つもないし、恐らくいつまでも存在するだろうが、戦争の克服は依然として我々の最高の目標であり、人間文化の究極の帰結である。愛は憎しみに、理解は怒りに、平和は戦争にまさるということを、深く心に焼き付けねばならない」と述べたのでした。

その第一次大戦に敗れ、自信を失って新しい強力な指導者を待望していたドイツの青年たちに熱狂的に迎えられた『デーミアン』は、出版こそ1919年でしたが、執筆されたのはこのエッセイと同じ1917年のことで、主人公エーミール・シンクレアの魂の成長の物語がこの考え方に立脚して展開されています。「私は、自分の中からひとりでに出てこようとしたものを生きてみよう」と望んだだけだった。なぜそれがこんなにも困難だったのだろうか」という冒頭の扉に掲げられた言葉がそれを物語っています。

幼少年時代に魔術師に憧れていたヘッセの願いは、13歳になる年から、「詩人になるか、さもないければ何にもなりたくない」ということがはっきりわかった(『略伝』)、と変わってきます。これは、「詩人」とは言葉による魔術師であり、下らない「いわゆる現実」に対抗する「第二の現実」を作品によって作り出したい、ということだったのでしょう。ところが、この世のあらゆる職業には、そのための前提条件、初心者のための学校や授業があり、修業の道があったのに対して、詩人にだけはそれがなく、「詩人である」ことは許された名誉なことなのに、「詩人になろう」とすることは不可能で、馬鹿げた、恥さらしなことであり、教師たちに怪しまれ、疑われ、嘲笑され、こっぴどく侮辱され、自分と遠い目標との間に深淵が横たわっていることに気づかれます。それでも彼はこの決心、運命に従い、難関を突破して入った神学校を退学し、機械工場で見習いをしたり、書店員になったりしながら、祖父の図書室にあった膨大な蔵書を読み漁り、独学で自らを教育しつつ詩作に励み、

27歳の『ペーター・カーメンツィント』(1904)で最初の文学上の成功を勝ち得たのです。

この処女作と、『車輪の下』(1905)『ゲルトルート (春の嵐)』(1910)『ロスハルデ (湖畔のアトリエ)』(1914)『クヌルプ (漂白の魂)』(1915)などの諸作品では「わがまま (愛我心)」のテーマが様々に変奏されていますが、魔術の手法が意図的に展開されるのは『デーミアン』が初めてといえるでしょう。

### 『デーミアン』の魔術

デーミアンという謎めいた人物は、主人公エーミール・シンクレアの上級生として登場しますが、そもそもデーミアンという名前が曲者です。一説にはデーモン (Dämon) とカイン (Kain) を組み合わせたデマイン (Demain) のアナグラムとしてこの名前が考えられたともされているように、デモニッシュな超自然的な力を連想させるところがあります。彼はシンクレアがクローマーに強請られて窮地に陥っている時に突然現れて救いの手をさしのべますが、彼がどうやってクローマーを追い払ったのかは謎に包まれています。そして、このクローマー事件のことはその後二人の間で、まるで暗黙の了解があるかのように二度と口にされず、最終章でデーミアンが別れを告げる直前に、やや揶揄気味に口にされるだけです。

彼の母親はエヴァ夫人と呼ばれますが、勿論、聖書の最初の女性イヴを連想せる名前です。そしてこの母と息子は恋人のような関係にある、と噂されています。主人公エーミールが性に目覚めてから見るようになった夢に、生家に戻って自分を迎えてくれた母を抱擁しようとする、それは母ではなく、デーミアンと自分が描いた絵に似ており、逞しいと同時に女性的で、その人物と礼拝であると同時に犯罪でもある抱擁を交わし、深い幸福感と良心の呵責を感じた、とありますが、後に出会ったデーミアンの母こそその憧れの人物であると悟り、彼女を愛するようになります。しかし彼女がエーミールの

前に姿を現すのは、物語も後半の第七章「エヴァ夫人」に入ってからのものであり、それなのにエヴァ夫人はずっと前からエーミールのことを良く知っており、居間には彼が描いたハイタカの絵が飾られていて、彼女の方から先にこの綽名を名乗ります。

彼女はエーミールが自分を愛していることを知っていますが、それには応えようとせず、愛について二つの喩え話をして聞かせ、彼の愛が「自分の中で確信に達する力」を持ち、「引きつけられるのではなく引きつける」ようになるようにと忠告します。彼は次第に彼女が自分の「内心の象徴」に過ぎず、「自分にとって重要であり運命であるものすべて」が彼女の姿をとることに気づかされてゆきます。

この他にこの小説に登場して名前が告げられるのは、オルガン奏者のピストーリウスと性欲に負けて自分はダメな人間だと自殺しようとするクナウアーという少年だけです。この二つの名前には特段の意味はないようですが、ピストーリウスはアブラクサスの神についてエーミールに教えてしばらく彼を導くものの、彼自身は自分の運命に完全に身を任すことができない弱い人間でした。クナウアーもまた思いがけない導き手でもありましたが、元々はエーミールに救いを求めて近づいてきたのでした。この二人から彼は「各人にとっての本当の使命はただ一つ、自分に到達する」ことで、「重要なのは何かある運命ではなく、自分の運命を見出し、完全にくじけずにそれを生き抜く」ことだけだということを学びます。

## 聖書とキリスト教信仰への疑問

登場人物だけでなくストーリーの運び方にもこの小説には独特なところがあります。その一つは聖書に書かれていることを、キリスト教や世間一般とは違った見方で問い直していることです。まず初めに、エーミールは果樹園からリンゴを盗んだという嘘の話をしてクローマーに取り入ろうとして、逆に強請られるのですが、これは勿論エデンの園から知恵の木の実を盗んで食



べたアダムとイヴの話を書き連ねさせ、また、それが嘘であることによって、「盗み」と「嘘」との二重の罪が仄めかされているのです。

デーミアンがエーミールに解釈して聞かせる創世記のカインの額の傷の話と新約聖書のゴルゴタの丘でイエスと一緒に磔刑にされた二人の罪人の話はキリスト教徒の一般的な解釈や常識を覆すものです。これでデーミアンはエーミールの(そして読者の)キリスト教に対する常識を疑わせ、一般には「許されていない」、悪をも司る神の必要性を説きます。それがアブラクサスの神だというわけですが、これは初期キリスト教の異端とされたグノーシス主義の考え方で、これをヘッセは当時精神分析の治療を受けていたラング博士から借りて読んだ、C.G. ユングの『死者との七つの語らい』からヒントを得ています。そもそも『デーミアン』を書くきっかけとなったのは、1917年にラングの紹介でユングと会ったことにある、と言われており、デーミアンはユング、ピストリウスはラングをモデルにしていると考えられています。

聖書からの話は他にも、ゲッセマネの園でのイエスの孤独(弟子たちは眠りこける)、ヤボクの渡しでのヤコブの天使との戦い(私を祝福して下さらなければあなたを去らせません)、などが匂わされていますが、第八章「終わりの始まり」の最後で別れを告げるデーミアンの言葉は、少し強引かもしれませんが、最後の晩餐のイエスの言葉を思い起こさせます(ぶどう酒は私の血、パンは私の身体)。そして、「君はまたいつか僕を必要とすることがあるかもしれない。… その時君が僕を呼んでも、僕はもう気軽に馬に乗って来たり、車で駆けつけたりはできない。その時君は自分の心の中に耳を傾けなければいけない。そうすれば僕が君の中にいることに気がつくよ」と言ってエヴァ夫人からの饞のキスをしてくれます。次にエーミールが目覚めた時にはデーミアンの姿はなくなっており、それ以後彼が「暗い鏡に運命の様々な姿がまどろんでいる自分の心の奥底に沈み込めば、あとはただ黒い鏡の上にかがみこみさえすればよい。そうすれば、今は全く彼と、私の友であり導き手である彼と瓜二つの自分の姿が見えてくる」と作品が締めくくられます。

## 幼年時代の「小さい男」

ここで先程あげた三つの自伝風の文章の中の『魔術師』にも『魔術師の幼年時代』にも登場する不思議な妖精のような「小さい男」について書かれた文章を引用してみましょう。

「しかし、これらすべての魔術的な現象の中で最も重要で、最も素晴らしかったのはあの「小さい男」だった。この男を最初に見たのがいつのことだったのか憶えていない。彼はいつもそこにいたという気がする。私と一緒にこの世に生まれてきたのだと思う。この小さい男はちっぽけな灰色の影みtainな存在で、霊とも妖精とも、天使とも悪魔ともいえる小人で、夢の中でも目覚めていても、時々姿を現して私の前を歩いて行った。これには父や母によりも、理性によりも、いやしばしば恐怖によりも従わざるを得ないのだった。このチビが姿を現すと、彼だけしか存在しなくなり、何処へ行こうと何をしようと、真似をしなければならなかったのだ。危険な時に彼は現れた。たちの悪い犬や怒った年上の仲間が追いかけてきて、私が危うくなると、そういう一番困った瞬間にそのチビが現れ、私の前を走って道を示し、救いをもたらすのだった…」(『魔術師の幼年時代』)

自分と一心同体のようでありながら、いつも自分より先にやるべきことをやって見せて自分を導き、危機一髪の状態から自分を救出してくれる守護霊のような存在だった幼年時代の「小さい男」こそ、後にエーミール・シンクレアを導いてくれるデーミアンとなったのだ、とすることができるでしょう。小さい男についての自伝的メールヒェン(1921～23)の方が『デーミアン』(1917)よりも後に書かれているのは、このメールヒェンがいわば『デーミアン』の謎解きとして書かれたのだ、と考えることができます。

『デーミアン』が執筆されたのは1917年のことですが、出版されたのは1919年、しかもヘッセの名前ではなく病床にある友人エーミール・シンクレアから託された原稿としてフィッシャー社に送られ、『デーミアン—ある青

春の物語』エーミール・シンクレア著として匿名で出版され、これが大ヒットして新人に与えられるフォンターネ賞を授賞されると、本当の執筆者は誰かが問題にされ、新チューリヒ新聞の編集者で評論家のエドゥアルト・コロディが1920年6月24日の同紙紙上にヘッセであることを論証、7月4日付けに公開書簡の形でヘッセにそれを認めることを迫ったので、ヘッセも自分が編集する月刊誌「ヴィーヴォス・ヴォコー Vivos Voco (1919年10月 Richard Wolterck と創刊)」でやむなくそれを認め、フォンターネ賞を返還し、1920年11月の第4版(17,000部)から、『デーミアン—エーミール・シンクレアの青春の物語』ヘルマン・ヘッセ著と改めたのでした。

### C.G. ユングとの親近性

ところで、この偽名の秘密が公に明かされる以前の1919年12月3日に、C.G. ユングがヘッセに宛てて書いた手紙が残されています。

「(…) あなたの卓越した、また誠実なご本『デーミアン』に対し本当に心の底から御礼申し上げねばなりません。匿名にされていらっしゃるのをぶち壊すのは、不躰で厚かましいこととは存じますが、このご本を拝読しました時に、これはなんらかのかたちでルツェルンを経由したものに違いない、という気がいたしました。(…) あの小さなクナウアーがシンクレアに対してそうだったと同様に、今日の人間の隠蔽と救いようのない頑迷さがまたもや私の心にしつこくのしかかってきた、丁度そういう時期にあなたのご本は私のところにやって来ました。ですからあなたのご本は私にとって、嵐の夜の灯台の明かりのような作用を及ぼしてくれたのです。あなたのご本は思いつく限りで一番素晴らしい終わり方をしています。というのは、前に起こったすべてのことが本当に終わり、そして、そこから本が始まったすべてのことがまた再び始まる場所、つまり、新しい人間の誕生と目覚めでもって終わっているのです」

「ルツェルンを経由したものに違いない」とは、ルツェルンに診療所があっ

たラングのもとでヘッセが治療を受けたことを暗示しているのですが、この作品の精神分析的な要素のことを指摘しているだけではなく、ユングが1916年夏に書いて親しい友人に配った『死者への七つの語らい』をヘッセがユングから借りて読み、その中に出てくるアブラクサスの神についてのヒントを得たのだらうということを推測しているのです。しかし、ユングは、ヘッセが自分の著書からアイデアを剽窃したのがけしからん、などとは言っていません。この手紙に対してヘッセがどう反応したかの記録は残されていませんが、ヘッセの方でもそういう受け止め方はしなかったのでしょうか。むしろここには問題意識を共有する者同士の共感と同意、密かな目配せのようなものが感じられます。二人の極度に内向的な気質と当時のヨーロッパ社会に対する危機意識、特に、世俗化の果てに形骸化して、市民社会の道德規範に堕してしまったキリスト教精神を問い直す必要があるのではないかという、ヨーロッパ精神史の捉え方の共通性が、期せずしてグノーシス主義やアブラクサスの神への注目という形をとって現れたのだ、と見なすことができるでしょう。

『デーミアン』の最終章の表題が「終わりの始まり」とされていることにも注目しておきましょう。ここでこの小説は終わっているのですが、実は、デーミアンが自分の心の中にいる自分の導き手であることを悟ったエーミールが、その認識を前提にしてもう一度これまでの自分の歩みを振り返って回想したのがこれまでの物語だったのだ、ということにお気づきになるでしょう。そうすると、クロマーに強請られてビクビクしていたエーミールを救ってくれたのはデーミアンではなくて、実はエーミール自身が、自分はカインと同じように強い人間であることを自覚して、自らクロマーと対決したのだ、ということがわかります。

デーミアンに注目を促されて、自分の家の入り口の上にある紋章の鳥の絵を描くと、卵から抜け出そうとしているハイタカの絵になり、それをデーミアンの昔の住所に送ってみると、授業中の机の上にそれに対するデーミアン

からの返事と思われる紙切れが見つかり、そこに「鳥は卵から抜け出そうと戦う。卵は世界だ。生まれようとするものは一つの世界を破壊しなければならない。鳥は神に向かって飛んで行く。神の名はアブラクサスという」と書かれてあった、というのも、エーミールが一人でやったことであり、この前の章にある「私はその頃すべてのことを夢幻的な予感に促されてやっていたので」という言葉だとか、授業中の先生の口から聞いた「アブラクサス」の名前やそれについての説明などからエーミールによって紡ぎ出された言葉だと考えることができるでしょう。

このようにしてエーミールが古い価値観の殻を自ら脱皮して、新しい世界観を構築しつつ自己形成していく経過が、あたかもデーミアンという導き手の助けを借りて行われたかのように紡がれた夢幻的な物語として成立していくのがこの小説の秘密なのです。この小説の冒頭に掲げられている「私は、自分の中からひとりでに出てこようとしたものを生きてみようと思っただけだった。なぜそれがこんなにも困難だったのだろうか」という言葉の沈痛な響きの秘密もここにあるのだ、ということができるでしょう。デーミアンこそエーミール・シンクレアの *Eigensinn* 「愛我心」だったのです。これが詩人としてのヘッセの魔術です。

## 「終わりの始まり」

人間の心の中で演じられる内面的なドラマを小説のストーリーとして構築していくヘッセの魔術的な手法は『デーミアン』以降のいわゆる中期の作品でも駆使され、『デーミアン』と相前後して書かれた『子どもの心』(1918) や、第一次大戦の終結後にベルンの家を引き払い、妻子を捨てるようにしてスイス南部のモンタニョーラに移り住み、隠者のような生活をしながら、これまで戦争捕虜救援活動でせき止められていた創作意欲が一気に噴き出すようにして次々に書かれた『クラインとワーグナー』(1919)、『クリングゾルの最

後の夏』(1919),『シッダールタ』(1922)といった,後に「内面への道」と括られる作品群にもそれを認めることができます。また,五十歳を迎えた1927年に出された『荒野の狼』にいたっては,作品の後半で「魔術劇場」なる世界が描かれて,主人公の魂の奥底に秘められた願望が明るみに出される仕掛けになっており,ヘッセの魔術的手法を味わえるのですが,今日は残念ながらここまででお話を切り上げねばなりません。皆さんが興味を持って下さるならば,そのお話はまた次の機会に,ということにしましょう。